日本自然詩人の世界

―孤獨的精神の傳統―

峯村文人

一　孤獨と澄心
二　赤人の世界
三　西行の世界
四　芭蕉の世界

一　孤獨と澄心

井伊直弼は、彼の茶道の集大成書「茶湯一會集」(註一)に、その極意として一期一會の說をなし、「抑茶湯の交會は、一期一會といひて、たとへば、幾度おなじき主客交會するとも、今日の會にふたゝびかへらざる事を思へば、實に我一世一度の會なり。去るにより、主人は萬事に心を配り、聊も鹿末なきやう、深切實意を盡し、客にも此會に又逢ひがたき事を辨へ、亭主の趣向何一つもおろかならぬを感心し、實意を以て交るべきなり。是を一期一會といふ。必々主客とも等閑には一服をも催すまじき筈のこと、即一會集の極意なり。」と言つてゐる。茶の湯の交會が眞に深い佳境に入る道は、主客がそれを一世一度の交會の機會と覺悟して深切な「實意」を盡すにあることを說いたものであ

る。又同書では、獨座觀念の境地に及んで、「主客とも餘情殘心を催し、退出の挨拶終れば、客も露地を出るに、高聲に咄さず、靜にあと見かへり出で行けば、亭主は猶更のこと、客の見えざるまでも見送るなり。扨中潛り猿戸その外戸障子など、早々しめ立などいたすは不興千萬、一日の饗應も無になる事なれば、決して客の歸路見えずとも、取かた付け急ぐべからず。いかにも心靜に茶席に立戻り、此時にじり上りより這入り、爐前に獨座して、今暫く御咄も有るべきに、もはや何方まで可被參哉。今日一期一會濟みて、ふたゝび返らざる事を觀念し、或は獨服をもいたす事、是一會極意の習なり。」と言ひ、更に語を繼いで、

此時寂寞として、打語らふものとては、釜一口のみにして、外に物なし。誠に自得せざればいたりがたき境界なり。

と言つてゐる。「實意」を盡した主客の交會が終つて爐前獨座の閑寂にひたる時の妙境を說いたものである。私は茶道の事はわからない。しかし、茶道論書を讀んでゐてかうした境地が述べられてゐるところに出會ふと甚だ感動せしめられる。そして、かうした境地は實は自然詩人の世界のあり方に外ならないといふ事に氣づかしめられて來るのである。芭蕉は「奥の細道」の中で、「淸閑の地」立石寺にいたつて次のやうな有名な一齣を遺した。

日いまだ暮ず。麓の坊に宿かり置て山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年舊、土石老て、苔滑に、岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり岩を這つて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入蟬の聲

右の一齣を「一會集」の言葉に讀みくらべて見るならば、「一會集」の「寂寞として、打語らふものとては、釜一口のみにして、外に物なし。」の境地は、まさに、「奥の細道」の「岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。」の境地であり、「一會集」の「釜一口のみ」の澄韻は「奥の細道」の句の「岩にしみ入る蟬の聲」の澄韻に外ならなかつたといつてよいであらう。「一會集」の「獨座」

は人と人との世界からの逃避ではなくして、あくまでも深切な「實意」による交會を――換言すれば「まこと」による主客の和合を盡したあげくの孤獨の世界であり、さうした「孤獨」にあつて「澄心」の境地に到達した時、其處にあつたものは釜一口の澄み入つたひびきに統一せられた物心一如の寂寞の世界だけであつたが、私は、此處に、「風雅の誠」に生きつつ、「孤獨」の寂寞に全身心を澄み入らしめて自然の一韻にいみじくも合一した芭蕉の世界を髣髴たらしめる事が出來るのである。

「一會集」の著者井伊直弼は、茶道ではじめ石州流に學び後に一派をなした人、禪學にも通じて所謂茶禪一味の境地を求めてゐるが、「一會集」の完成は弘化三年（西紀一八四六年）頃と推定せられてゐるから(註二)、芭蕉の「奥の細道」の旅の元祿二年（西紀一六八九年）におくれる事百五十餘年である。――尤も、周知の通り「奥の細道」の稿が成つたのは元祿七年で、旅中に成つた句の中にも推敲の重ねられたものがあり、「閑かさや」の句のごときも「さびしさや岩にしみ込む蟬の聲」「淋しさの岩にしみ込む蟬の聲」の二つの句形が傳へられて居り(註三)、「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲」の句形となつたのは旅中以後推敲の過程を經てからの事であるが。――しかし、右の事は、私に芭蕉が「笈の小文」に「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。」と述べた心をあらたに想起せしめるものがあると共に、日本の自然詩人の世界のあり方に關して考察をめぐらす一つのいとぐちを見いださしめるものがあるのである。

（註一）「日本哲學全書」第十一卷―藝術論篇―所收。
（註二）「井伊大老茶道談」の解題の中で述べられた中村勝麿氏の說。但し、今同書を見る事が出來ないので、「日本哲學全書」の茶道論書の校訂者三枝博音氏の解說によつた。
（註三）「初蟬」及び「泊船集」に「さびしさや岩にしみ込蟬のこゑ」の句形が傳へられ、「芭蕉翁追悼こがらし」に「淋しさの岩にしみ込せみの聲」の句形が傳へられてゐる。又「句選年考」には上五に「涼しさや」とあるものもあつたらしい事を傳へてゐる。

二　赤人の世界

島木赤彦は、「萬葉集の鑑賞及び其批評」の中で、山部赤人の作、

　み吉野の象山の際の木末には幾許もさわぐ鳥の聲かも　（萬葉集卷六）

に對して、「一首の意至簡にして、澄み入る所が自ら天地の寂寥相に合してゐる。」と評して歌の姿の至純である事を指摘し、更に、柿本人麿の「雄渾な性格に徹し」た歌に比して赤人の歌は「沈潛した靜肅な性格に徹して」ゐると說いた「歌道小見」の文を引用して居り、同じ時の赤人の作、

　ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる淸き河原に千鳥しば鳴く　（萬葉集卷六）

に對しては、「靜肅な感動」のあらはれがある事、「一種澄み入つた世界へ誘ひ入れられる心地」のせられるものがある事、「一首各音の持つ響きが虔ましく緊まつてゐる」事等を指摘してゐるが、又赤人の特色に關して、「赤人は人麿の如き豪壯さがなくて、誰よりも深い沈潛がある。沈潛の心は幽かにして靜かな心である。それがよく現れれば、自らにして天地の寂寥に合し、惡しくすると、平板にして生氣のないものになる。」のであつて、右の歌のごときは「その長所を遺憾なく發揮し得たもの」の中に入るといふ事を述べてゐる。

島木赤彦の以上のやうな手堅い歌評が萬葉集における赤人の特色を甚だ鮮明ならしめ赤人の歌を新しく價値づけた事については定評がある。たしかに、赤人の世界はかうした把握の仕方を擇ぶ事によつてその本質に迫り得るのであらう。ただしかし、「深い沈潛」と言ひ「靜肅な感動」と言ひ「澄み入る」と言ひ「天地の寂寥相に合してゐる」と言つても、芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蟬の聲」のごときに對してもこれらの言葉はあて嵌め得るのであつて、目的が同時代の作家に對する特色の闡明と言ふやうなところにある場合はともかくとして、赤人や芭蕉の史的位置をもあ

きらかにしようとするならば、これ以上の性格の追求をも合はせ試みなくてはならないのである。

土居光知氏は、かつて、「文學序説」の中で赤人を論じて「彼が自然の清淨さを讃美した裏面には人生の汚濁さを厭惡する心があつたであらう。」とし、「當時奈良の社會はすでに寵臣が權を專らにし、風俗が糜爛し始めてゐた」事及び「奈良の都會生活を見ると既に腐敗し、彼をして面をそむけしめるものがあつた」事を指摘せられた以外に、「山部の姓が示す如く代々山林官であつたとすれば、自然に親しむ性情を遺傳して來たのであらう」と考へられる事、「赤き」と「清き」とは古代語として同じ意味を有してゐたから「赤人の名にも清淨を慕ふ心が察せられる」事等をも擧げられて「清淨なるものを慕ひ、自然のうちに放浪した」理由とせられてゐるが、赤人の經歷は不幸にしてあきらかではなく、かうした方面からする自然詩人としての赤人の世界への追求もさして見るべき成果を期待せしめないであらう(註四)。又同じ書に土居光知氏は「赤人は自然の素朴な戀人であつて、自然との融合がおのづからできる」作者であつたとも述べて居られるが、かうした觀方からも赤人の世界があきらかになつて來るとは思はれないのである。

そこで、私は先づ赤人の理智的性格について述べなければならない。

若の浦に潮満ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る　（萬葉集卷六）

赤人の此の一首について、島木赤彦は、特に第三句の「潟を無み」が「赤人流の微細味を持つてゐて、猶多少理智的に行つてゐる。」と評してゐる(註五)。しかし、此の理智的なところは單なる技巧だけの問題を越えて實に赤人の全作品を貫いてゐると見るべきものであらう。赤人は、神岳に登つていだいた舊都への思慕の情を、

明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき戀にあらなくに　（萬葉集卷三）

と詠じ、春日野での「逢はぬ兒ゆゑ」の戀愛の情を、

高桜の三笠の山に鳴く鳥の止めば繼がるる戀もするかも　（萬葉集卷三）

と詠じてゐるが、戀情を詠じても、それは理智の中から靜かに燃え立ち、燃え立つものを理智によつて抑制し、凝視しつつ嚙みしめてゆくといつたやうなものとならざるを得なかつたのであつて、かうした傾向は特に相聞歌のごとき ものの歌からをどうしても小さいものとしてしまふといふ傾向に向はしめるのである。島木赤彦が「沈潛した靜肅な性格」と言つたやうな性格は此の理智的な性格に由來してゐるのだと思ふ。島木赤彦は「高桜の」の歌を赤人の傑作として激賞し、「微細所を捉へてゐる」寫生歌として人麿その他の何人も及び得ないものがある事を强調した(註六)が、しかし、五味保義氏もその赤人論(註七)で、「此一首の聲調にはどこか理智的にひゞいて來るところがあるやうに思ふ。」と言はれたものは赤人の性格にとつて本質的なところに觸れられたものであり、此の歌にあつても見のがす事の出來ないものなのである。

赤人がかやうに理智的であつたと言ふ事は、彼みづからをして、容易には、對象への他者としての「觀る姿勢」を崩さしめなかつたと言ふ態度にも連つてゐる。例へば、故太政大臣藤原家――亡くなつた藤原不比等の家――の山池を詠じた歌、

いにしへの舊き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり　（萬葉集卷三）

といふやうな一種幽玄な深さを湛へた作品にあつてさへも、「舊き堤」と言ひ「年深み」と言ひ「池の渚と」言ひ「水草生ひにけり」と言ふやうに、對象の精密な把握と語句の整然たる配列とからは、靜かな凝視とそれを支へてゐる冷徹な理智とを感ぜしめるものがあり、日並皇子の「かりもがり」の際の人麿の挽歌「ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも」（萬葉集卷二）や同じ時の舍人の歌「御立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも」（萬葉集卷二）のごときに線の太い把握とそれを支へてゐる奔騰した主觀とが見られるのと比較して見

るならば、その特色は瞭然たるものがあるであらう。そして、赤人の此の「觀る姿勢」から生れたものの中、最も代表的なものを擧げるとすれば、萬葉集卷三の富士山を望んで詠じた歌を推さなければならない。

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　布士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　渡る日の
影も隱ろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行き憚り　時じくぞ　雪は降りける　語り繼ぎ　言ひ繼ぎ行
かむ　不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は零りける

此の歌は富士山の澄高雄大な自然美を表現したものとしてたしかに傑作といふべきものであらう。「赤人の歌風の完成と」(註八)言ふ評のごときが行はれる事も當然であらう。しかし、此の歌には、感情の自然な流露といふよりはむしろ整齊澄徹の緊張感によつて私共をうつて來るものがあり、內面的な氣息の深さといふよりはむしろ高潔な知性的氣韻によつて私共を動かして來るものがあるのであるが、一種冷嚴で人間的息吹には遠いもののある事も認めないわけに行かない。此の事は、言ひ換へれば、赤人の理智の眼が、澄高雄大な富士に接して起された感情の波動から離れ、對象を他者として觀る事に透徹して行つてゐるといふ事に外ならないのであつて、此の理由のために、私共に主客の距離感から脫しがたいもののある事を覺えしめるのである。賀茂眞淵は、「萬葉考」の大考に、赤人の歌について「巧みをなさず有るがままに」詠じて妙なる歌となつたのは「本の心の高きが至り」であると述べてゐるが、對象が對象の世界の側に即して整齊の美を形成し、作者自身のさうした高潔な人間的世界は、その觀る眼を對象の世界に澄み入らしめてゐるけれども、あくまでもその觀る位置を崩さない事によつて整齊の美を一層全からしめてゐると言ふ事が出來るかと思ふのである。

しかし、人間としては眞淵の言ふやうに高き心の持主であり、理智的にしてしかも觀る事に沈潛しつつ、物の眞實に澄み入る事を求めてゐた赤人のごとき詩人にとつて、富士山の詠のごときはたまたま素材自體がおのづから制作活動に異常な緊張を與へ澄高のしらべを成さしめたのであつて、むしろ孤獨に身を置いて寂寞の世界に澄み入つてゆくと言ふ事がその本質なのではなからうか。そして、其處にこそ、「自然詩人」としての赤人の眞の面目がうかがはれるといふべきなのではなからうか。かやうに考へて見て、私には再び最初に掲げた二首の歌に歸つて行かなければならない事が感ぜしめられて來る。

み吉野の象山の際の木末には幾許もさわぐ鳥の聲かも

ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く

赤人の此の二首の歌は次に掲げる長歌に對する反歌である。

やすみしし　わご大王の　高知らす　芳野の宮は　たたなづく　青墻ごもり　河波の　清き河内ぞ　春べは
花咲き撓り　秋されば　霧立ち渡る　その山の　いや益々に　この河の　絶ゆること無く　百磯城の　大宮人
は常に通はむ

赤人は、長歌において、吉野の宮をめぐる「清き」自然を詠じ、その自然の幽久感を詠ずると共に、吉野の宮の永遠の繁榮を祝福してゐるのである。が、しかし、すでに先進によつて指摘せられてゐるやうに吉野の宮を詠じた長歌ではかうした詠じぶりには實は類型的なものがあるのである。柿本人麿には、

やすみしし　吾大王の　聞し食す　天の下に　國はしも　多にあれども　山川の　清き河内と　御心を　吉野
の國の　花散らふ　秋津の野邊に　宮柱　太敷きませば　百磯城の　大宮人は　船並めて　朝川渡り　舟競ひ
夕川わたる　この川の　絶ゆることなく　この山の　いや高知らす　水激る　瀧の宮處は　見れど飽かぬかも

（萬葉集卷一）

があり、大伴旅人には、

み吉野の　芳野の宮は　山がらし　貴くあらし　川からし　清けくあらし　天地と　長く久しく　變らずあらむ　いでましの宮　（萬葉集卷三）

があるのにならべて見ればあきらかであらう。長歌において、赤人の心は宮廷と自身との關係の世界にあり、言はば公式的謹嚴さの世界にあるのであつて、その限りでは、人麿や旅人と共に圓滿な教養人としての存在なのである。しかるに、反歌になると、かうした類型的な長歌を承けたものでありながら、それぞれの作者は獨自の世界をあきらかにあらはして來るのである。

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む

昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりにけるかも

前者は人麿の反歌であり、後者は旅人の反歌である。人麿は長歌の律動と氣格の流れとをがつしりと承け止め、盛りあがつた感動を逞しく歌ひあげて淀むところが無い。旅人は長歌の世界から呼び起されて來た懷舊の世界に立つて、眼前の「象の小河」の清けき姿に對する感動を歌ひあげ、しかも其處に長歌の世界をも承け止めてしらべを高めて行つてゐるのである。しかし、赤人にあつては、「み吉野の」の歌にしても「ぬばたまの」の歌にしても、自己の世界を長歌の世界から絶ち切り全くの「孤獨」に置いて自然の寂寞に沈潛しようとしてゐる態度が見いだされるであらう。かうした態度はもはや赤人の世界の本質的なものだといふ外はない。

私は　以上の考察において、理智的にして、觀る事に透徹しようとし、孤獨において寂寞に澄み入らうとする赤人

の世界をあきらかにして見たつもりである。そして、かやうに觀て來ると、自然詩人としての赤人の世界は、自然詩人としての西行や芭蕉の世界に對してまさに原型的意味を持つものであつた事を思はないわけに行かないものがある。土居光知氏は「文學序說」の中で、「自然の愛の發達」といふ方面から、自然詩人の系譜について「西行や芭蕉も赤人を祖としてゐる。」と述べて居られるが、私は以上のやうな角度から赤人・西行・芭蕉の關聯を考へて見たいのである。

（註四）赤人の場合の此の問題に關しては、五味保義氏も「萬葉集講座」第一卷中の「山部赤人」の論に「その時代の社會的情勢などから、容易に作品を論じ得られぬ」點を强調して居られる。

（註五）島木赤彥「萬葉集の鑑賞及び其批評」

（註六）同　右

（註七）「萬葉集講座」第一卷—五味保義氏「山部赤人」

（註八）同　右

三　西行の世界

萬葉集以後の詩人で、深く寂寥の中に生きた詩人としては第一に西行を擧げる事が出來る。彼も亦自然の中に生きるべき世界を見いだし、身を「孤獨」に置き、寂寥に住して、「澄心」を求めた詩人であつた。しかし、西行になると、その和歌にあつては古今時代からの理智的反省的傾向を眞實探求の場としての詩の世界に深めて行つて居り、更にその「人間」にあつては先づ境涯を出家として限界づけ、現象界を超越して眞如界に悟り入るべき場に生きて澄み入る事を求めてゐたと言ふところから、その詩の世界もいちじるしく形而上的であり觀念的であつた。したがつて、西行の世界は赤人の世界に對して對蹠的なものとして成立してゐたと言はなければならないであらう。さうしたもの

でありながら私共をして大いなる寂寥に觸れ深い哀れに觸れさせないではおかないのが西行の歌なのである。

憂き身にて聞くも惜しきは鶯の霞に咽ぶ曙の聲

栞せで猶山深く分け入らむ憂き事聞かぬところありやと

西行は「憂き」を厭ひ「憂き」境から離脱して悟りの「澄心」に入る事を求めた。

いかでわれ清く曇らぬ身となりて心の月の影を磨かむ

影冴えてまことに月の明き夜は心も空に浮びてぞ澄む

何となく汲む度に澄む心かな岩井の水に影映しつつ

瀬を早み宮瀧川を渡り行けば心の底の澄む心地する

西行がいかに深切に清淨の世界に澄み入る事を求めてゐたかを知り得るであらう。そして、右の歌は、西行の求めてゐたものが、先づ悟りとしての眞如の月の世界であつた事を示してゐるのである。しかし、思ふにまかせぬ人間の心は容易に「澄心」の境地に透徹し切る事を許さない。西行にとつては、まさに、

如何にせむ影をば袖に宿せども心の澄めば月の曇るを

涙のみかき暗さるる旅なれやさやかに見よと月は澄めども

が彼の生の姿の眞實であつた。「如何にせむ」の歌の「袖」には涙が暗示せられ、「月の曇る」には涙に曇る意味が暗示せられてゐるのであつて、一は「月の曇るを」であり一は「月は澄めども」であるが、いづれの歌も涙のために心が曇らされてしまふ歎きの歌に外ならない。そして、彼の「寂しさ」に堪へると言ふ生活も實は此の涙をこらへ、「澄心」と「煩惱」との間にあつて、しみじみと人間の心を省みると言ふ生活に外ならなかつたと言ふ事が出來るであらう。

訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住み憂からまし

山里に誰をまたこは呼子鳥ひとりのみこそ住まむと思ふに

花も散り人も都へ歸りなば山寂しくやならむとすらむ

山里にうき世厭はむ友もがな悔しく過ぎし昔語らむ

寂しさに堪へたる人の又もあれないほりならべむ冬の山里

脫俗の境涯にあり、「澄心」を求めて、自然の中で「孤獨」の「寂寥」に住し、「孤獨」にあつて「寂寥」に堪へると言ひながら、「寂寥」に徹し切れず、逆に、そのために「人間」の世界へ深く歸つて來てゐると言ふのが西行の世界であつた。しかし、それにもかかはらず、西行は「孤獨者」としての出家の位置を轉じなかつたのであつて、其處に、

木枯に木の葉の落つる山里は涙さへこそ脆くなりけれ

のごとき堪へがたい涙の歌が生れ、

谷の間にひとりぞ松は立てりけるわれのみ友は無きかと思へば

水の音は寂しき庵の友なれや嶺の嵐の絶え間絶え間に

のごとき、自然の姿の中に自分の姿を見いだし、自然の姿の中に友の姿を見いだしてゐる歌が生れたのである。そしてかうした西行の心が、寂寥の素直な享受となつて表現せられると、

松風の音哀れなる山里に寂しさ添ふる日ぐらしの聲

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

のごとき歌となり、あたたかい人間的息吹の流露となつて表現せられると、

岩間閉ぢし氷も今朝は解け初めて苔の下水道求むらむ
吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねむ
道のべの清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ
小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかされておどろかすかな

のごとき歌となり、更に、時として、轉じて自然の爽凉・清澄の相に觀照の眼をそそぐと、

よられつる野もせの草のかげろひて凉しく曇る夕立の空
底澄みて浪こまかなるさざれ水渡りやられぬ山川の光

のごとき歌が生れ、自然の生命の躍動の相に觸れると、

降り積みし高嶺のみ雪解けにけり清瀧川の水の白浪

のごとき歌が生れたのである。しかし、西行の歌境は、遂に、「底澄みて」の歌や「降り積みし」の歌の方向に徹して行く事が出來なかつたのであつて、むしろ次のやうな作にこそその中核をなしてゐるものを見いださざるを得ないのである。

吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき
眺むとて花にもいたく馴れぬれば散るわかれこそ悲しかりけれ
吉野山花の散りにし木の下にとめし心は我を待つらむ
捨てて出でし憂き世に月の澄まであれなさらば心のとまらざらまし
行方なく月に心の澄み澄みて果はいかにかならむとすらむ

西行は自然の中に身を投じながら、その生み出す歌境は心の姿の把握に向つて居り、しかも其處に結ばれる觀念か

ら再び自然の姿に歸つて行くといつたやうな世界に生きてゐた詩人であつたといふ事が出來るであらうか。深切に心の澄み透つて行く事を求めてゐた筈の人間でありながら、「捨てて出でし」の歌や「行方なく」の歌のごときが生れてゐるのも、彼の「澄心」が對象の眞實に觸れて澄み入つて行くところに求められずして觀念の世界に求められたものであつたからに外ならないと思ふ。

赤人があくまでも「觀る姿勢」を崩さずして對象に澄み入らうとした態度に生きてゐたのに對して、西行は觀念的に生きて「澄心」を求め、しかも遂に「憂き」寂しさを脱し得ない心を抱いて自然を友とし、自然を友としつつ心の姿を反省し觀念の世界を廣げ且つ深めて行つたのであるが、西行のかうした態度は、對象から把握せられるものの整齊透徹の美を成さしめるところは無かつたかはりに、其の歌の世界に內面的な深さが投影せられてゐたり內面的な葛藤の氣息が波うつてゐたりして、そのために、悠揚迫らざる廣がりの世界をも形成せしめるところがあつたのである。しかし、西行のごとき態度からは眞の意味の主客合一といふごとき境地が見いだされるのは容易ではないであらう。例へば、「岩間閉ぢし氷も今朝は解け初めて苔の下水道求むらむ」の歌について見ると、此處には、たしかに、溫雅にして迫らざるしらべの中に春の自然の動きが微妙にあらはれてゐる。しかし、結句の「道求むらむ」は作者の觀念の世界の投影であつて、生命感の流動を阻んでゐるものがある事を認めないわけに行かない。更に、勿論境地は同じではないが、良寛の歌に、

山かげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも

のごとき立派な作のある事を想起すると、西行が「岩間閉ぢし」の歌のやうな素材を取り上げながら何故に澄み入る事をしなかつたかといふ事に想到せざるを得なくなつて來る。が、その理由はもはや更めて說明するを要しないであらう。

かうした西行の世界をいみじくも超え得た自然詩人は芭蕉であつた。

四　芭蕉の世界

芭蕉は元祿四年の「嵯峨日記」の四月二十二日の條に次のやうに書いてゐる。

廿二日。朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝに、むだ書して遊ぶ。其詞、

喪に居るものは悲しみをあるじとし、酒を飲ものはたのしみを主とし、愁に住するものは愁をあるじとし、徒然に住するものはつれ〴〵を主とす。

さびしさなくばうからましと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし。又よめる、

山里にこはまた誰をよぶこ鳥ひとりすまんと思ひしものを

獨すむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑をうしなふと。素堂此こと葉を常にあはれむ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とは、ある寺に獨居していひし句也。

西行の詠じたといふ「さびしさなくばうからまし」の歌は、「山家集」に見える「訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住み憂からまし」を指し、「山里に」の歌も同じく西行の作で、「山家集」に見える「山里に誰をまたこは呼子鳥ひとりのみこそ住まむと思ふに」を指してゐる。芭蕉は、此の文で、「寂しさ」に住し「寂しさ」をあるじとした西行の心を味はひつつ、同じく「寂しさ」に住し「寂しさ」をあるじとする自らの生活を反省し、更に、西行の「山里に」の歌に求められてゐる「獨居」の生活の趣を禮讃して、自らの「獨居」の句を示してゐるのである。

訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住み憂からまし

憂き我をさびしがらせよかんこ鳥

芭蕉の「憂き我を」の句が西行の「訪ふ人も」の歌を蹈まへて成つたものである事は言ふを俟たない。しかし、此の二つの詩境は決して等しいものではない。なるほど芭蕉は「孤獨」の「寂しさ」に住して西行の「寂しさ」に住した世界と等しいもののやうに言ひ、西行の歌を引用した筆の勢ひを承け「予も又」と言つて「憂き我を」の句を示して居り、句そのものも西行の歌を蹈まへてはゐる。が、西行の歌が「寂しさ」に住して「寂しさ」を主としつつしかも「寂しさなくば」と反省して「憂き」に及んでゐるのに對して、芭蕉の句は、「憂き」に住し「憂き」を主としたところに立つて、「寂しさ」に徹したい心で「かんこ鳥」に呼びかけてゐるのである。西行の「憂き」は、此の歌の場合、現實に其處に住してゐない、すでに脱し切つてゐる筈の世界に外ならないにしても、彼は「寂しさ」に徹し得ずして「憂き」世界に再び心を返してゐる。しかるに、芭蕉の「憂き」は現實に住して嚙みしめつつある心であり、その上に立つて「寂しさ」に徹して行かうとする境地であつた。しかも、「寂しがらせよかんこ鳥」と詠じた時、芭蕉の心は「憂き」身のままに「かんこ鳥」と共に「寂寞」の世界に限りなく澄み入りつつあつたのである。したがつて、芭蕉の「寂しさ」は決して「澄む」事を恐れたり後をふりかへつたりするやうなものではなかつたのである。それは、西行の「寂しさ」が觀念としてその「人間」から離れたところにあつたのに對して、芭蕉の「寂しさ」がその「人間」のあるがままの心の上に「澄心」の世界として見いだされてゆくべきものであつたと言ふ相違でもある。和辻哲郎博士はかつて此の句について「『憂き』は消極的な、重く沈んだ心ですが、『寂しさ』は積極的な、無限を戀ふると云つた樣な、高く昇る心です。この區別をハッキリと心得て、自然の内の深い『寂しさ』を強くかみしめてゐた芭蕉はえらいと思ひます。」(註九)と述べられたが、私は以上のやうに觀て來てかうした解釋に自然に從ふ事が出來る。

芭蕉は元祿七年の秋――すなはち最後の年の秋に有名な次の句を遺してゐる。

此の道や行く人なしに秋の暮

すでに周知の通り、此の句が成つた時に

人聲や此の道かへる秋の暮

の句も成つたが、結局「此の道や」の句の方を遙かにすぐれたものとして、取るべき事に定まつたのだといふ。支考の「笈日記」に「此二句の間いづれをかと申されしに、この道や行ひとなしにと獨歩したる所、誰かその後にしたがひ候半とて、是に、所思といふ題をつけて、半歌仙侍り。」と記されてゐるのである。芭蕉の心には「人聲」への「懷かしさ」(註一〇)が先づ動いたのであらう。其處に「人聲や」の句が生れたのであらう。しかし、彼の心の深奥から彼を衝き上げてゐたものは彼の俳諧の道を彼以外にはつひに行く人もないといふ寂しさであり、その寂しさが「人聲」によつて觸發されて逆り出て來た。其處に「此の道や」の句が生れたのである。私には、此處に、「人聲や此の道かへる秋の暮」の弱氣をおしのけて、寂しさの極みに透徹して行く芭蕉の叫びに似たものを聞き取る事が出來るやうな氣がする。西行は「寂しさに堪へたる人の又もあれないほりならべむ冬の山里」と詠じて「人懷かしさ」に低徊したが、芭蕉はさうした「寂しさ」をのりこえて更に前進したのである。此の相違は西行の「訪ふ人も」の歌と芭蕉の「憂き我を」の句との相違にも相通ずるものだと思ふ。加藤楸邨氏は、「此の道や」の句について、「芭蕉講座」(註一一)の中に「『所思』と題してこの句が提出せられた時は、もう純粹な自然の寂寥のみではない、心中に『此の道』を俳諧の道としてゐる孤獨極りない氣持がはつきりとみつめられてゐたに相違ないのである。この場合の『行く人なしに』は道路をたどる行人や、抽象的な人といふやうなものではなく、『此の道』に眞實を探究する人のないことが意識せられてゐるのである。」と述べて居られるが、總じて、芭蕉の句には、形而上的なものが多分にあつて、さうした點で

西行の歌の世界に甚だ近いものがある。しかし、西行の歌のそれは、單なる觀念の世界として浮きあがつて行く傾向が多分にあり、そのために「寂しさ」を求めても不安を伴ふものとならざるを得ないといふやうなものであつたが、芭蕉の句のそれは、自らの生きる必然必至の道の眞實に連なつてゐたのであつて、「寂しさ」の極限を求めて澄み入らざるを得ないものであつたと言ふ事が出來るであらう。

しかし、芭蕉はかうした道に生きたが故に、「風雅の誠」を責める事を說き、心性を高雅ならしめる事と「私意」を離れて對象の「本情」を確と把握する事とを重んじないわけに行かなかつた。芭蕉のやうな世界にあつては、眞にすぐれた詩は心に形而上的なものの眞に高いものがあつてはじめて生れるのであり、又、それは對象の眞實と心の眞實とが感合した一點において把握せられる時にのみいきいきと輝き出て來る筈だからである。

白菊の目に立てて見る塵もなし

芭蕉の死期にも近い元祿七年九月の園女亭の會に示された此の句について、加藤楸邨氏は「冷光を放つまでの念力の籠つた凝視」と「內奧のものが凄いまでに迫つてくる」清淨感とを指摘して居られるが(註一二)、これこそは右のやうな芭蕉の世界から生れた一つの頂點だと言つても過言ではないと思ふ。此處まで來ると、私は、西行の世界を超えてかの赤人の高潔な心性と透徹した凝視との世界が呼應してゐる事をはつきりと感じて來る。しかも、芭蕉の世界は、もはや赤人の世界ではなく、あきらかに西行の世界を通過し、いづれの世界をも自らの世界への傳統として立たしめつつおのづから醇乎たる詩境を完成せしめてゐるのである。

私共は「奧の細道」の「閑かさや」の句の境地のごときも以上に觀て來たやうな芭蕉の世界に置いてのみはじめて正しい理會に到達する事が出來るのではなからうか。

松風や軒を廻つて秋暮れぬ

此の秋は何で年よる雲に鳥

秋深き隣は何をする人ぞ

これはいづれも死期に近い頃の芭蕉の句であるが、「寂寞」から無限の「寂寞」へと澄み入つて行つた「人間」の記録に外ならない。しかし、それはなほ且つ「旅におのれが心を責めて物の實を知る生き方」(註一三)に徹してゆく事と離れてはあり得なかつた。西行は、

ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

と詠じたが、芭蕉は、遂に、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

と詠じて死んで行かざるを得なかつたのである。

(註九)「續芭蕉俳句研究」

(註一〇)「寒雷」掲載の能勢朝次博士の「芭蕉俳論評釋」の御説參照。

(註一一)「芭蕉講座」第三卷。

(註一二)同　右

(註一三)「送許六詞」に「古へより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實をしる事をよろこべり」とある。

(一九四八、五、一六)